



今、輝く女たち

“アジア女性会議”に参加して 菅原政子

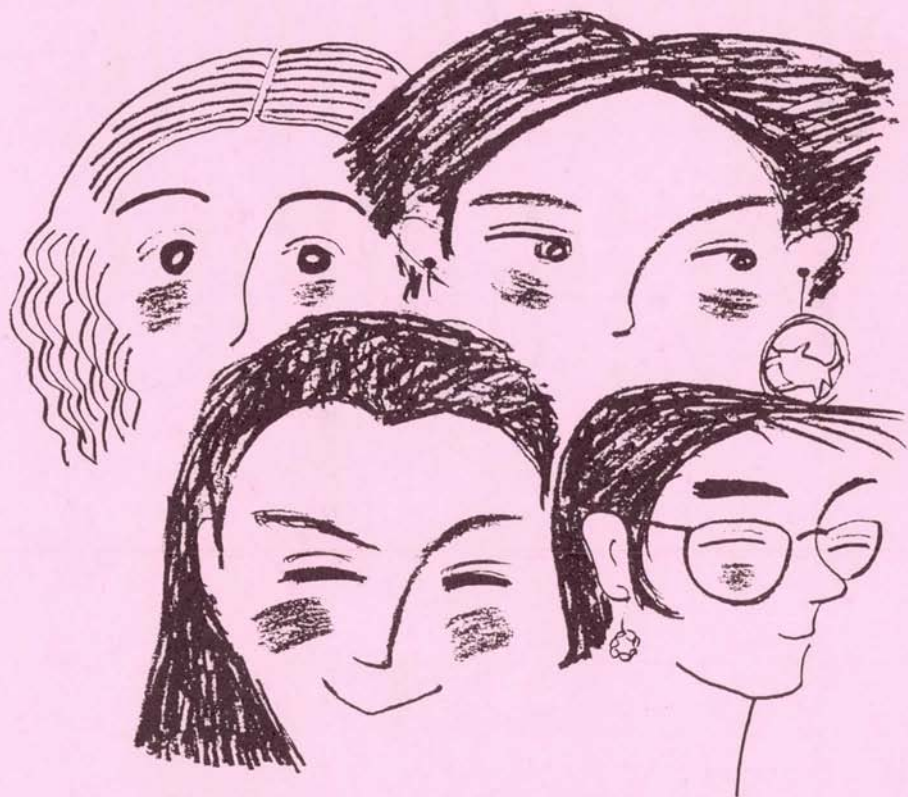
生き生きグループ

生き生きミニコミ大集合

愛媛・ミスコン取材顛末記 小倉いづみ

今月の編集は〈あこら新宿〉

173号412円(400円+税12円)



目次

「アジア女性会議」に参加して

菅原政子 3

生き生きグループ・生き生きミニコミ大集合

離婚女性のネットワーク

ハンド・イン・ハンドの会 8

女たちの情報をひろげたい！

ジョジョ企画 10

マジメから不マジメへの19年

交流 12

今を問いつつ明日を拓く

日本キリスト教婦人矯風会 14

女たちの情報紙『ふえみん』

婦人民主クラブ 16

〈Weの会〉のこれから

Weの会 18

一人でも多くの女性と考える行動をおこしたい

アジアの女たちの会 20

文化も女性が半分は占めたい

ミズ・データ・バンク 22

夜道を安心して歩きたい！！

性暴力とたたかう女たちのネットワーク 90 24

「均等法」改正運動を大きく盛り上げたい

女を愛する女たちのコミュニティ

ワーキング・ウーマン 26

国際的フェミニストのグループ

I F J 30

研究と運動の並存する解放の手段としての女性学をめざして

日本女性学研究会 32

広がる「あごら」地域活動の拠点

あごら 34

めじゃーなりすとのめ 愛媛・ミスコン取材顛末記

小倉いづみ 36

北から南から

ウィン女性企画 38

あごらのあごら

39

“アジア女性会議”に参加して 菅原政子



アジアからのゲスト・スピーカー・プロフィール

アリフィン・ロハナ（マレーシア）ウイメン・クライシスセンター代表
クリスナワティ・タティ（インドネシア）心理学博士
ク・イエンリン（台湾）“Hsinchu Wind”紙論説委員長、国立交通大学教授
グーナティラケ・ヘマ（スリランカ）AWRANコーディネーター
サッカー・プラバ（ネパール）女性と開発センター（カトマンズ）議長
サマラスリヤ・シリーン（スリランカ）女性子供国際基金協会理事
ザッファ・ファレッハ（パキスタン）パンジャブ大学地理学部助教授
サンチャゴ・アイリーン（フィリピン）UNFEMアジア・太平洋地域チーフ
スワンナノン・アンジャナ（タイ）出版社ディグレス・プレス共同オーナー
チェ・ヤン・エ（韓国）韓国性暴力救援センター講師
デュオン・シ・デュエン（ベトナム）国立女性学センターコラボレーター
チンピマイ・ジラボン（タイ）「女性の友」ソーシャルワーカー
デレス・クイントス・テレシータ（フィリピン）環境と開発に関する国家政策活動女性委員

バロイ・マンジュ（バングラデシュ）クリスチャン・ヘルスケア・プロジェクト委員
デン・ビジュン（中国）北京大学女性学センター責任委員
マラーン・ジェイ・コニー（フィリピン）デ・ラサール大学英語特別研究員
モンテロ・リタ（インド）女性と宗教を考えるカトリック成人女性の会創立メンバー
ング・シュイメン（ラオス）ユニセフ、女性と教育部門プログラム・オフィサー



四月二日から四日にかけて国立婦人教育会館で行われた「アジア女性会議」に参加した。

日ごろからアジアの問題は気になってはいた。私とアジアの関係が抜き差しならないものであること…アジア抜きにはどんな問題もゆきずまってしまうだろう…ということ等々、私の頭のすみっこにいつもあることはあった。だからといって「近くて遠い国」の言葉どおり意識して動かなければアジアはちっとも近くはならないのだった。

とにかく参加してみよう、この三日間で何かが見えてくるかもしれない。しかし、正直いって船橋さんが言うようにアジアの女性問題を自分自身の解放と結びつけては考えられない。何

か突きつけられそうな予感がする。重苦しいものを抱えこみそうな気がする。明るくなれない私がそこにいた。



一日目のプレゼンテーションでは「創りだそう女たちのアジア」をテーマに十八人のアジア各地からのゲストスピーカーが登場、各国の実情等を訴えた。

アジア地域の女性が直面する問題を二日目のテーマ分科会につなげていくため、これらそうそうたるメンバーがそれぞれの立場からスピーチをした。

ファシリテーターの上野千鶴子、サンチャゴ・アイリーンの両名がこれを受けて、「七年前の第一回アジア女性会議となんら状況は変わっていない、むしろ悪くなっている感があることにショックをうけている。女性搾取はさらに強化され、経済発展と共に貧しいものはさらに貧しさを強いられる。新しい問題としては環境問題やエイズなど…しかし、今日ここにこれからのアジアの運動を担う人々を迎え協議できることはたいへん強い…」と発言。また参加者の中にも「聞いているうちにだんだん憂鬱になり、頭も痛くなってきた」と語る人もいたりして、アジア問題の重さが初日に提示されたかたちとなった。



それにしても主催者の苦勞は並みではない。翌日の分科会に備え、ゲストスピーカーと通訳の打合せ、モデレーター、コメンテーター等の打合せを当日の夜行い、その後プリントの印刷をやっているところもあったり、会館の夜は動きっぱなしだ。それなのにとても空気が和やかで生き生きしているのはなぜなのか。キャンセル待ちの人のため夜中までかけずりまわってくれた事務局の伊藤さん親子。ほとんど眠っていないのにやさしい顔をした人ばかり。悪いけど、いつまでもいたいと思わせるものがあつた。アジアからのゲストスピーカーはじめ当日参加のアジアの女性たちもリラックスムードを漂わせていた。

二日目の分科会はアジア各地からのゲストスピーカーを迎えて、ジェンダーを機軸にした分析、報告を受け、それを受けて参加者が主体的に分科会を構成して今後の具体的な方向を見出していく場とする。

昼食を挟んで、九時から五時まであるので移動は自由だ。ここではどんな分科会があつただけ紹介する。

①女性と政治

②女性と教育

③アジアの女性学

④女性と労働

⑤セクシュアリティ

⑥家父長制と女性への暴力

⑦女性と開発

⑧女性とメディア

⑨女性と表現

⑩戦争と性

⑪女性・生殖・技術

⑫アジアと買売春

船橋さんが壇上で「第十三分科会として『女性と娯楽』をやります」と叫んでいたけど最後の日に報告がなかった。参加者がいたのかな。



私は従軍慰安婦問題に取り組んでみたいと思っていたので⑩戦争と性の分科会に出た。参加者は約二十人、他の分科会では



多い所で七十人を超えた所もあったようだ。すべての分科会にいえることだが、一日中話し合っても足りないくらいだ。とても他の分科会に出るゆとりはない。三日目が終わって「ああー 今日が始まりの日だったからねえ」とか「三日間じゃなく十日くらいあったらねえ」という声が聞こえた。それぞれの分科会で行われた会議は、大いに盛り上がったのだろう。報告集を楽しみに待ちたい。

「戦争と性」の分科会では、「沈黙の恨」のビデオ、ウリヨソネットワークの人々から「従軍慰安婦」の話、北沢杏子さんから「フィリピンの買売春」の構造の話、山根百代さんから「中国残留婦人」の話があり、コーヒータイム



の後、私たちも沈黙しないで…と参加者全員がそれぞれの思いを語りあった。残念だったのはこの分科会にはゲストスピーカーの参加がなかったことだ。三日目の全大会で、「アジア女性会議」の雰囲気をつむぐことにした。



さて最終日、一人十分の割当てで各分科会のモデレーターの方からの報告があった。

第五分科会「セクシュアリティ」の報告の後、安積さんから障害を持っている女性の立場として、「障害を持っている人の七〇から八〇パーセントがアジア地域に居住していると言われ、その実体は過酷さを極めています。障害をもっている女性たちが連帯することは早急な課題だと思っています。あらゆる地域、各国の女性会議において、障害をもっている女性の積極的な参加をつくり出し、発言の場所を保障すること。特に次回のアジアの女性会議において「障害と女性」の分科会を提案したいと思います」と提言があった。

各分科会での討議内容、具体的なプロジェクト、行動プランの報告およびフロアからの発言を受け、全体討議に入った。その後、船橋さん・山口さん・上野さん等起草委員

が夜を徹して作り上げた“アジア女性会議宣言文”を採択した。この本会議を皮きりに五日から地域会議へと繋がっていく。



会議を終えて帰途につく人にちょっとインタビューしてみた。

「“女性と開発”にできました。伝えきれなかったことを山ほど背負っているので、ネットワークができたあかつきには、どうやって皆さんにわかっていただこうかって次のことを一生懸命考えたいと思います」「私は市議をしていますので“女性と政治”にできました。女性たちの会議は気が楽ね。構えないで言える。このことが逆に悲しいね。決定的場に女性を送っていかない限り、物事は変わらないんだというのが共通認識でしたね。フェミニズムの視点が生かされないと社会変革もやっていかれないって確認できたわね」「第一歩ではあるけれど、アジアからのゲストとのコミュニケーションがまだまだだったって思う。もっと個人として接触する機会が欲しかった。次回はもっともっとアジアの女性たちとのコミュニケーションを深めていきたいわね。経済事情もあるだろうけどワークショップに三分の



一くらいアジアの女性、それから日本にいる留学生、在日韓国・台湾の女性を呼べるというinaあって思った」「大阪で地域会議をやります。本会議を一步前進させた分科会をつくり上げていきたいなあって思ってます。小規模な会議ならではの、とらわれない明確な批判をしあい、草の根運動レベルのものも突き出していきたいし：きっとおもしろいものができると思います。本会議と地域会議をひっくりめてアジア女性会議なんだって思ってます」

次回の会議では私もアジアの人に気楽にインタビューできるよう語学を身につけようと決心したのです。

離婚女性のネットワーク 円 より子



一九七九年当時、衝撃的な命名といわれた「ニコニコ離婚講座」も、それほど驚かれなくなった。

十数年の歳月は、暗いイメージと、罪や恥の意識を離婚から消し去ったようである。

ニコニコ離婚講座が、そのことに大きく貢献したと、心ある人々が言ってくれる。

「離婚を勧める講座」かと誤解され、いわれなき非難を受けてきた私としては嬉しいが、離婚を取りまく状況は、十数年前とさほど変わっているわけではない。

確かに、わたちの結婚観と離婚に対する意識は変わった。「死んだ結婚」にしがみつくよりは、離婚を「新しい人生の出発」ととらえるようになった。

世論調査を見ても、「絶対に離婚しないほうがいい」という人々は減り、「やむをえなければでもいい」という人が増えている。

しかし、現実的な面を見れば、女の再就職状況は厳しく、離婚女性が住居費、子どもの教育費まですべてをカバーできるほどの収入の得られる仕事は見つけにくい。

子どもの七割は母親がひきとっているが、父親からの養育費はほとんどない。

別れる時の財産分与や慰謝料にしても、別れた妻の半数は一元ももらってはず、もらったとしても二三百万円が

大半という現状。

こうした、財産分与・慰謝料・養育費のおそまつさは、男性優位の経済社会の中では、今の法律や税制が女性にどうしても不利にできているからだ。

私たちは、離婚講座を毎月一回開いて、正確な情報と知識を力として、後悔しない人生を選んでほしいと思っているが、一方で、我が国の不利な法律や税制の改正に向け闘ってきた。

しかし、こうした制度は一朝一夕には変わらないようだとすると、できることで、自分たちの生活を守るしかない。

上手な自立作戦、子どもへの離婚の影響を最小限にとどめる方法、福祉の利用の仕方。

こうしたことを「離婚」という経験をした人たちの知恵を結集して、今悩んでいる人たちに伝えていこう。ネットワークを組んで支えあっていこう。ということ、ニコニコ離婚講座の姉妹篇として生まれたのが、ハンド・イン・ハンドの会なのである。

文字どおり、「手に手をとって」。

金無く、家無く、職無く、コネ無く、中には親からも疎まれ、健康も害していて、まさに、無い無い尽くしの女もいる。

そういう女たちにとって、情報と知識とネットワークは、どんなに支えになることか。

そして、それは大きな力にもなる。

ハンド・イン・ハンドの会は、一九八〇年五月、東京青山の喫茶店で、十数人の有志でスタートした。そして、翌年一月、最初の会報『ハンド・イン・ハンド』をガリ版刷りで製作。

地方からの「情報がほしい」という声に答え、二号目から基本郵送料で納まる小冊子にして百二十部印刷。

この『ハンド・イン・ハンド』が、口コミで今は千五百人の購読会員を持つ。

入退会自由。購読料（現在一年三千六百円）を振り込むだけで会員になれば、役員もいない。

代表は私、円より子だが、骨身を削って書いた原稿料で事務局の経費や印刷代を支え、電話番をする雑役婦にすぎず、何の権限もない。

そんな自由な会がいいのか、積極的に参加し、子どもたちとの合宿や地方での会合を世話してくれる人たちが多い。この会から、無料の電話相談「離婚一〇番」が生まれ、貴重な調査もできた。

毎月、東京・大阪・名古屋・仙台などで、元気な女たちの楽しい会合も持たれている。

たちにはたいへん貴重なものでした。

編集作業は煩雑で、時間もかかり、深夜まで仕事する毎日でした。気がつくと、夜が明けていたこともあったほど。ちょっとしたトラブルが起きるのは不思議ではないし、覚悟もしていましたが、予定どおりに進まない、からだにもこころにもずっしり重みがかかります。「こんなにうまくいかないのなら、いっそ投げ出してしまおうか……」と、ふっと頭をかすめます。

そんなときわたしたちは、いただいたアンケートを何度も読み返しました。おもいきり元気のいい、大胆で痛快な女たちの返信は、わたしたちに「元気」を充電して、「さあ、出発！」と、新しい気持ちで立ち向かわせてくれました。ようやく出版まで漕ぎつけたのも、この「エネルギーの素」があったから。ふり返ってみれば、たっぷりと女たちから励まされ、支えられていたのです。そして500 ページにわたる全国版の女性情報誌になりました。

ジョジョ企画を女性の年間記録手帳である『スケジュール・ノートブック』や、女性の先駆者を写真で紹介するカレンダー『女の暦・姉妹たちよ』で知ってくださっている方も多いと思います。

手帳や暦、そしてこの『女たちの便利帳』を出版し続けていくジョジョ企画の心意気の核は、「女たちの情報をひろげたい！」ということです。この流れにそって、これからも仕事をしていくつもりです。たとえば、女たちの日々の歩みを知りたい。何年も書ける日記帳が欲しい。そこで、このふたつを合わせて、現在までの150 年間の女たちの日々の歴史を収録した大判の日記帳を作ろうと、ただ今作業をすすめています。この社会で抜け落ちてきた女たちの歴史がここに蘇ります。女たちの歩みをもっと身近に感じ、あなた自身の歩みも重ね合わせる一冊です。みなさん、ご声援ください。 （百）

◎『女たちの便利帳 1992～1993』定価1957円

一般書店で買えます。発売は教育史料出版会。

近くの図書館にも推薦して下さると嬉しいです。

◎『スケジュール・ノートブック』『女の暦・姉妹たちよ』今秋発売。

■連絡先 ジョジョ企画 TEL 0473-77-6900

千葉県市川市南八幡 1-16-24

女たちの情報をひろげたい!

ジョジョ企画

『ここにある情報はすべて、女の手から手へ渡ってきました。

さまざまなグループやお店のことを教えてくれたのも女ですし、アンケートに答えてくれたのも、それをまとめたのも女です。そして、あなたに届けます。

情報はそれぞれの地域ごとにまとめてあります。

あなたの住む町、あなたの行きたい所、あなたの知らなかった場所を楽しんでください。

そして何より、誰かと出会いたい時、相談したい時、ともに楽しみたい時に使ってもらいたいです。

女たちが横ならびに分ちあえたら最高です。

女ができること いっぱいある。
女がほしいもの いっぱいある。
女に伝えたいこと いっぱいある。』



1991年11月、この文章から始まる『女たちの便利帳1992～1993』を発行することができました。さまざまな地域で暮らす、さまざまな女たちの活動の自己紹介をまとめた情報誌です。

この1冊をつくりあげるために、5000通を越える方々にアンケートを送り、1200通余りの返信がありました。つまり、このたくさんの女性との出会いがこの本の出発点となったわけです。グループやお店、ひとそれぞれ、活動する場所も環境も違っていました。女性のネットワークをひろげたいという気持ちは同じ。

今までジョジョ企画を応援してくれた方々からは他の新しい情報が届きました。初めてアンケートの返事をいただいた方からも、親しみのこもった文章で、活気に溢れた情報が得られました。返送された用紙の一枚一枚がわたし

マジメから不マジメ への19年



ますの きよし

一九七三年創刊。最初の約十年間は、たいへんマジメだった。中でも「性別分業」を疑い、「施設依存」にも異議を唱える「子育てを考えるシリーズ」は、当時ちょうど全共闘世代が子どもを生みはじめた頃だったこともあって、この世代の関心を集め、本紙の目玉になった。ここで出会った人たちで編集した『現代子育て考』全5巻（現代書館）は、いわばそのマジメ時代の落とし子みたいなものだ。

いまへあごろんにいる前林則子さんの長期連載「獄中から無実の訴え・シリーズ」も、当然ながらマジメ一筋。初めて彼女に面会に行った時のぼくはナント丸刈りだった！

それが、ここ数年、軟弱・不良路線に変わったのは、すべて編集者の、いい加減で軟弱な姿勢の反映である。一説には、全共闘世代そのものが体制化し、さらにその後の「遅れてき

た世代」が、「世のため、人のため」型の発想を毛嫌いのので、それにひきずられているのだ、という解釈もあるが……。

正義派弁護士とされている福島瑞穂さんまで「交流」に連載を書く時は楽屋オチのネタを使い、「歩くマジメ」と言われた向井承子さんも、艶咄調に軟化し、最近の特集「どうします？ あなたの遺骨、葬式」に至っては、遺骨を食べた話から、昔の恋人の恥骨と合体させてくれ、とか、ケンタッキーフライドチキンの骨と混ぜて捨ててくれ、というのまで、かつてのマジメさは見るかげもない。それなのに、いまだに「体制に異議申し立てをしている人たちの相互交流」の新聞だ、などという看板を恥ずかし気もなく掲げている。羊頭をかかえて狗肉を売る、とはこのことではないだろうか。国際情勢とか、天下国家を論じる記事はいくら探しても見当たらない。それは、単に編集者が政治音痴で、そういう問題を全く理解できないからにすぎないのだが……。そのくせ、ポルノとか、性の話題には敏感で、たびたびその種のHな記事が紙面を賑わす。そのためか、ある女性読者は、長い間「この編集者はタダのスケベジジイ」と思っていた、という投書さえあった。実は、本当にタダのスケベジジイなので、ギクリとしたが……。

タブロイド版四ページの新聞形式で、一面には「今月の



スペシャル」と題する特集。連載記事としては、「気分はラブコール」

「センセは教室でカルメン踊り」、

「女の子はなんて呼ぶの?」（これ、

性の話です）「あの橋を渡る時」、

「いろいろな老い」（訪問看護をし

てる人のルポ）など……。かつて「子

育て」をマジメに考えていた読者も、

今や「老い」を考えるようになった

歳月の流れが、これらの連載のタイ

トルにも読み取れる。もっとも育時

連（男も女も育児時間を！連絡会）

の記事はよく載るので、育児問題が

紙面から消えたわけではない。しか

し、中には、『交流』を育時連の機

関紙だと早トチリする読者もいるよ

うではあるが……。

読者層は、東京が約半分、他は北

海道から沖縄までの全国紙、と言

いたいところだが、読者が一人もい

ない県が約〇〇ある。女性読者が約三

分の二と、女性上位。年齢層も幅広

いが、やはり四十代が多い。

「編集方針」などないような、いい加減主義のミニコミの

くせに、最近珍しく「編集方針」らしきものが載った。そ

こでは、「啓蒙、啓発、お説教はしない。ペンやマイクを

持つ人はエンタテイメントを心掛けるべし」などとエラソ

ーなことを言っている。原稿料も払わないのに、筆者への

注文ばかり多くて、これでよく原稿が集まるものだと思

議がられている。

そうそう、忘れてはいけない。『交流』は、何と言っ

ても、誤植の多いことで群を抜いている。編集者はほとんど

校正をしていないのじゃないか、と陰口を叩かれているが、

本当は、字も知らないし、校正の仕方也不知道いから、こ

ういうことになるのである。なにしろ、「落ちこぼれてハ

ッピーに生きようぜ」と広言している編集者だから始末が

悪い。

こんな落ちこぼれ派のミニコミである以上、伝統あるあ

ごらの読者は、決して『交流』なんかに興味を持たないほ

うがいい。当の編集者が言うのだから、間違いない。でも

ネ、名門『あごら』内に潜行する不良分子のために、ソッ

と『交流』の連絡先をお知らせしておくことにしよう。

秘密厳守
他言無用

東京都中野区江古田 4-17-14 ますの方
月刊／一年分二千円／振替 東京 4・51709

今を問いつつ 明日を拓く



House in
*E*mergency
of
*L*ove and
*P*ace

矯風会は一八八六年、日本で最初の女性団体として結成されました。

現在は北海道から沖縄まで、十八部会、九十一支部に約三千人の会員が属し、新宿区大久保にある本部事務局はそのパイプ役的存在です。毎月、社会の情勢・会の活動を伝える機関誌『婦人新報』を発行、主権者としての視点を養っています。また、国内外を問わず他団体とも広く共同活動を繰り広げ、国連経済社会理事会へは世界矯風会がNGOとして参加し発言しています。

日々の活動は、会の三目標である「平和」「性・人権」「酒・たばこの害防止」を基軸に、私たちの人間としての尊厳を犯すもの、特に政治的・社会的歪みによってもたらされるさまざまな問題に対して、情報提供、電話相談、女性・母子のための施設運営など、今起きている被害への救援活動と同時に、政府・議会へ

の要請行動等多面的な取り組みを進めています。

■平和部

矯風会は、戦前も活動に「平和」を掲げながら、戦争を阻止できなかった反省に立って、戦後の反戦平和活動をしてきました。現在、PKO協力を名目とする自衛隊海外派兵の動きに危機感を持って反対運動をしています。

キリスト教を基盤とする団体として、思想信条の自由を大切に考え、靖国神社国営化や首相らの公式参拝に反対し、天皇代替わりの儀式が国費を使って神道式で行われることに反対してきました。天皇制をタブーにせず、自由に議論してゆくことを願っています。

原水禁運動の中では、韓国キリスト者女性との交流を通して、在韓被爆者の問題に眼を開かれ、政府や世論に訴えてきました。

平和とは戦争がない状態だけでなく、差別や貧困から解放され、すべての人の人権が尊重される社会をめざして、差別的撤廃、特に在日韓国・朝鮮人の人権問題や、アジアの南北問題とも取り組んでいます。

■性・人権部

性・人権部の活動としては、矯風会の先輩たちの男女平等・人権擁護の動きと実績を受け継ぎ、それを拡充強化することに努めています。

関連施設である慈愛寮は、要保護妊産婦のための専門施設として運営されており、女性の人権を守るために役立っています。

また、年々深刻化する来日外国人労働者の問題に対し、創立百周年事業として、国籍、年齢を問わない女性・母子のための「女性の家・HELP」を八六年に開設、九二年までの六年間に二十二ヶ国千人をこえる外国人女性が来所しました。その中の大多数がタイ人女性とフィリピン人女性で占められ、彼女たちが非常に劣悪な状況で働いている実態が明らかになっています。また近年は、日本人男性と結婚した外国人女性からの相談のケースも増えています。悲惨な緊急ケースを取り扱う中で、来日外国人女性にも婦人保護事業が適用されるための運動に努力しています。

他の重要な取り組みとしては、両性の平等に基づく性教育の推進、観光買春への反対運動、児童買春・性的搾取反対のための児童福祉法改正、子どもの権利条約の批准による法改正推進、売春防止法の改正による買春防止の強化などを主張しています。

従軍慰安婦問題については、韓国で先がけて取り組んでこられた尹貞玉氏との長年の交流をはじめ、人と人とを繋ぐ活動を進めつつ、国会における補償決議の要請、裁判支援なども積極的に進めています。

■酒・たばこの害防止部

酒・たばこは日常的な嗜好品として軽く見られがちですが、今では麻薬や覚醒剤と同じ「薬物」とみなされています。アルコールとニコチンは身体に習慣性、心に依存性を生じさせて、本人だけでなく周囲の人たちや子孫の健康にも被害を与えるからです。さらにアルコール依存症の場合は、家族の心に根深い傷を負わせ、家庭内暴力や不登校、また次世代のアルコール依存症の原因ともなっています。

私たちはかけがえない生命を守るために、害を受けやすい未成年者と女性に向けてパンフレット配布や視聴覚教育をおして、アルコール・たばこ・薬物についての正しい知識の啓発に努めています。自動販売機やCMの撤廃運動にも長年取り組み、良い環境作りをめざしてきました。

なかなか変わらない性差別的システムのもとの女性の社会進出は新たな葛藤を生み、拒食・過食症の原因ともなっています。アルコールを主として、広く摂食障害を含む嗜癖問題を対象に、毎月一回本部会館で相談例会を開き、確かな生き方を共に探っています。

連絡先 〒160 東京都新宿区百人町2-23-5

日本キリスト教婦人矯風会

☎ 03-3361-0934

女たちの情報紙

ふえみん
f e m ♀ n

婦 人 民 主 新 聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

婦人民主クラブ責任編集

週刊/1カ月/送料共650円 〒150 東京都渋谷区神宮前3-31-18
電話03(3402)3238(編集) 3244(事務局) FAX03(3401)3453

婦人民主クラブ

婦人民主クラブは、敗戦直後の一九四六年三月に、二度と戦争をくり返してはならない」という、多くの女たちの願いを寄せ合って、創立されました。それ以来、四十六年。戦後の状況は、婦人民主クラブにも、さまざまに影響を与えてきました。原水禁、反安保、反公害などさまざまな運動を経験してきました。(でも、婦人民主クラブはど

ふえみん 婦人民主新聞は、婦人民主クラブが出している新聞です。ふえみんという名前に変わったのは、九一年の春。フェミニズムと婦民のことばの意味を合わせて、ふえみんという新しい名前の新聞を作りました。

大判で四ページ、二ページを週ごとに交代し、フェミニズム、環境、平和と民主主義、家族、子どもと教育、健康、アジア、アフリカ、セクシュアリティなど、さまざまな分野の情報を掲載。今、女性にとって、また男性にとっても役に立つ新聞になりつつあります。

(婦人民主新聞は、一九九〇年までの縮刷版もできています。)

この政党、党派からも自由です。)現在、二十代から八十代まで、全国に会員がいて、支部を通じて活動しています。東京、外苑前にある事務局には、専任スタッフで十人以上の人間が働いています。ここには、会員、ふえみんの読者から、たくさんさんの情報が送られてきます。各地域での、集まり、女たちの動き、整理し、取材して、ふえみんに載

せす。大阪にも支局があります。

環境問題にとり組み、合成洗剤をなくそうと、石けんや無農薬茶、コーヒーなども、注文を受けて発送しています。石けんシャンプーは、三年前にナチュロンという新しいタイプを、太陽油脂と共同で開発、朝シャン族の抜け毛を防いで頑張っています。

1955年7月

原水爆禁止世界大会に向けて街頭署名と募金・新橋駅前



最後に、ふえみんなからのメッセージ。

女の生きやすい社会はみんなが生きやすい。

性差別を告発し、女の自立をめざそう。

戦争に反対し、自然破壊や環境汚染、

あらゆる差別に反対しよう。

一人ひとり、生きることが、輝くことでありたい。

1946年7月

婦人民主クラブ創立の発起人・後楽園





〈Weの会〉のこれから

稲邑恭子

〈Weの会〉は、八二年に半田たつ子さんによって創刊された月刊誌『新しい家庭科We』の読者たちの会のこと。「家庭科の男女共修」を掲げ、「自立した女と男を、人間らしい生活を、差別のない社会を育み創り出す」ことをめざし、従来の家庭科の枠組にとらわれず、くらしと教育にかかわる多岐にわたるテーマをとりあげてきた『We』は、夏のフォーラム、春、秋の集いを〈Weの会〉と共催し、多様な個性の人たちの出会いの場を提供してきました。

一昨年の夏に、最大の協力者でいらしたおつれあいを痛で亡くされた半田さんから、私たち編集スタッフに、これからは終末医療や死の問題を考えてゆきたいので編集から退きたい、あとを引き継いでもらえるだろうか、とのお話があったのが、昨年の春のこと。おぼつかなさはあるが、一同、なんとか引き継ぐ方向で方策を練った、夏から秋。

ところが、十一月初め、読者数の減少により企業として月刊誌を出し続けることはとても無理、という厳しい現実に直面し、急転直下、廃刊やむなし、との結論を出さざるをえなくなりました。

「家庭科の男女共修を前にして、いまから内容を創っていかねければならない時期なのに……なんとしても出し続けてほしい」という家庭科の先生を中心とした方たちからの熱烈なコールもあり、こちらとしてもなんとかしたいとは思いつつも、手だてがみつからない中で、

「『We』の豊かなネットワークだけは、なんとしても惜しい、せめて夏のフォーラムを続けられるために簡単な通信を〈Weの会〉から出していこう」という声が、会員の中から上がりました。

さて、それから——どうせ出すのなら、簡単な通信じゃあまりにも淋しい、もう少しどうにかならないものかと、ミニコミを発行している人、編集プロダクションをやっている人などに相談し、経費を試算すると、ワープロ印刷で購読者が千人集まれば、ということに。少ない編集スタッフで可能なのは、隔月号が限度だが、フォーラムの分科会の記録が充実しているので、それを再編集し、新たな記事

を付加して間に入れたら、といったあんばいで、あっちにぶつかりこっちにぶつかりとやっているうちに、隔月号六冊、別冊四冊で年間七千五百円（送料込）というラインになって、GOサインが出たのが十二月初めのこと。

《Weの会》から委託の編集スタッフというかたちで、元ウイ書房の私たち二人が編集作業に入り、一月初めに編集会議、二月末原稿締切り、三月に入って完全版下作成、と、何もかも初めての試行錯誤の戦場のような忙しさ。四月五日に、きれいに刷り上がった創刊号を手にとったときは、夢のようでした。

ともあれ改めて痛感するのは、これは半田さんの『We』の十年の貴重な業績があって初めて可能であったということ。印刷・製本も、すてきな表紙やレイアウトも、版下作りに協力して下さったのも、皆、《Weの会》のメンバー。陰の事務局長あり、編集長あり、購読者獲得に奔走して下さった人ありで、文字どおり《Weの会》の手づくりの雑誌であり、購読料やカンパを寄せて下さったのも、旧読者の方たちでした。

《Weの会》は、三十〜四十人の世話人はいても、代表を置かないゆるやかな組織。そのよさを生かしながらも、雑誌

の発行母体として機能していくためには、これから新たな工夫が必要となるでしょう。

創刊号の巻頭インタビューは、篠原睦治さんの「縛り合って生きる——せめぎあう共生」。手垢にまみれてしまった「共生」や「自立」という言葉を洗い直していく作業は、フェミニストたちへの刺激的なメッセージとなることでしょう。

五月発行の別冊『男から男へ』は、回を重ね、年ごとに充実してきた夏のフォーラムの、武田秀夫さん率いる「女の解放、男の解放」の分科会の記録を中心に。今までは、「踏み絵」を強要されているような気がするのか、遠巻きに見物だった男たちが「男の解放」を語りだし、面白くなってきました。

女と男、市民と教師、子どもと大人がそれぞれ出会い、ぶつかり合う格好の場になるよう、そして、読むことでフツと肩の力が抜けて元気が出てくるような雑誌になれば、と願っています。ぜひ、お仲間に加わって下さい。

〒2225 神奈川県横浜市区市緑区市が尾町1161-8

共学舎内 WE・編集室

☎ 045-974-3101

アジアの女たちの会が発足してから十五年、私たちをとりまく状況は大きく変化してきました。しかし、十五年前に私たちが提起した問題は、変わらず「今」の問題であり続け、それらは解決の方向に向かうどころか、今日より深刻な事態さえ迎えています。「アジアと女性解放—私たちの宣言」（一九七七年三月一日）で、私たちは、「国内では自立した生き方をばまれながら、アジアに対しては、経済侵略の一端を担わされる—こうした今日の女の状況は、実は、戦前の女のあり方と本質的にどこがちがうでしょうか」と問いかけましたが、いまなお同様の、いやさらに矛盾を深め深刻化した状況を私たちは生きています。会の機関誌『アジアと女性解放』は毎号特集テーマで作られてきましたが（現在休刊）、そのどれもが少しも古さを感じさせないことに、私たちは些かの自負を持ちつつも、一方苦く複雑な思いを噛みしめずにはられません。

買春観光も今ではずっと巧妙に、そして日常化してしまっています。それどころか、わざわざアジア各地にでかけなくとも、日本で容易に、アジア各国の女性に対する買春

アジアの女たちの会

行為ができるしくみができあがってしまいました。地方自治体が、日本の農村の「嫁」不足の解消に、リクルーターを利用するといった事態すら引き起こされています。私たち日本の女がそれを許してしまった、という側面を見逃すわけにはいきません。

買春問題に限らず、滞日アジア人女性に対する著しい人権侵害、深刻な刑事事件が多発し、一方「開発援助」の名のもとに、アジア各国で女性の人権を侵し、その生存すら脅かしている今日の状況を、どうしても女たちの力で変えていきたい——「思い」が先行し、少し欲張りすぎているかもしれませんが、私たちは現在、具体的には以下のような活動を行っています。また、これら以外にも、会員個々の研究・活動テーマ（たとえば戦後補償やフェミニスト・アート）についても随時集会を開催しています。一人でも多くの女性と考え、行動をおこしていきたいと願っています。

「立ち寄りサポートセンター」 滞日アジア女性の人権を守るための支援活動をし、『ハロハロ通信』を発行して

いる。たとえば個々の女性の抱えるトラブル（結婚、離婚、子どもの認知、養育費など）についての相談・支援や、刑事事件の加害または被害者になってしまった女性への支援（差し入れや面会、裁判の傍聴）等。また「町屋日本語教室」を隔週日曜日に開催。ただことばを教えるだけの教室ではなく、教える側と教わる側の相互協力で行っていく楽しさが生まれつつある。

「タイ女性支援基金」 タイ国内の女性解放グループ「Friends of Women」の出稼ぎ女性支援プロジェクトに活動資金を送る。また、滞日タイ女性の人権を守る具体的な支援活動（裁判や拘置に対する支援、雇用者やリクルーターから拘束されている女性の救出など）も行っている。「サワディー通信」発行。

「開発と女性」 ODAを女性の立場から監視する。具体的には、国際事業団の「開発と女性」援助研究会がまとめた、開発と女性に対する日本の援助政策のガイドライン（JICA提言）に対して、連続シンポ



ジウムを開催。「逆提言」をJICAに提出。また、海外青年協力隊に対し、隊員の買春行為について質問と抗議。開発教育にも取り組んでいる。

「水曜フリートーク」 今年二月からスタート。毎月第三水曜日の夜、話してみたい、あるいは話を聞きたい素敵な女性（会員や支持者、会員の知人）を招いて語り合う集まりで、会員相互の交流・学び合いを主目的とするが、第二回目より広く一般参加も呼び掛けることに方針変更した。記録集を発行予定。

「英文機関誌」 日本からの発信を重視、昨年四月復刊。今回のテーマは「日本における出稼ぎ女性」。次回のテーマは「開発と女性」、次々回のテーマは「日本の裁判制度」を予定している。（稲田 美代子）

■連絡先 アジアの女たちの会

〒150 東京都渋谷区桜丘14-110 渋谷コープ211

☎（昼）03-3508-7070

（夜間）3463-9752

ミズ・データ・バンク

ミズ・データ・バンクは一言で言ってしまうと、各地で活躍している女性たちやグループの活動紹介をおこなっています。広報とか宣伝にあたることです。

具体的には、年一回の女性の手帳『J. O. (ジェイオー) ダイアリー』と女の本の情報誌『EVEDATA (イヴデータ)』の発行。『女の本とミニコミ』の展示即売と通信販売。再生紙でつくったカードレターの製作。

女性の手帳『J. O. ダイアリー』は、毎日持ち歩く手帳に、女性の情報があったらの発想でつくり、十年になります。情報は、巻末の別冊資料にあります。この手帳は携帯用としての使いがってを重視するため、重量からくる頁制限があります。別冊資料で全国のグループの網羅をめざしていましたが、頁制限で不可能になってしまい、毎年テーマ別に掲載する方法をとることにしました。九一年の別冊資料は、お金をかけないで宣伝する方法で情報コーナーをもつ各地の会館・店

・スペースや新聞・雑誌・ミニコミなどの紹介、九二年の別冊資料は「はたらいている女性のネットワーク」で職能団体・はたらくことに取り組んでいるグループ・ユニオン・労働相談所などです。手帳は直販もありますが、年末に全国の文具店や書店をとおして多くの女性に渡るようにしています。そして別冊資料だけの販売は通常いたしません、この記事を読まれた方には送料込みで三百円でお分けいたします。

手帳の編集過程で全国各地の女性グループがミニコミ・パンフを含めいろんなものを発行していることを知りました。これら出版物には、女性の視点で文化や社会を見詰めて問いなおし問題提起発言が多くみられます。出版しても、どう多くの人に渡すかがわからないのと一般ルートの条件に当てはまらないものだらけでした。そこで交流の場として考えたのが、『女の本とミニコミ市』でした。催すと、思った以上に反響があり、以来、年二―三回のペースでおこなっています。集会やイベントなどたくさん女性のが集まる場がある時はお知らせください。広めることが目的ですから、展示や出張販売をいたします。直接参加が不可能な時はイベント用の展示・委託即売セットも考えています。

詳細はご相談いたします。

展示即売の回を重ねるごとに、来られない人のためブックリストの要望の声が多く聞かれるようになってきました。

一方、手帳の販売にかかわることで社会におかれた女の位置を思い知らされるようになりました。販売物の決定の場は仕入に女性の



責任者がほとんどと言っていいほど少ないのです。出版の世界ではと思い見ても同じようなものです。ただライターや編集員に女性が多いからなんとなく開かれた業界という感じがしますが、決定の場は編集長や決定に影響力のある営業にいません。もちろん女性がすべてをおこなっているBOC・松香堂・ユック舎などは例外です。マスコミも五十歩百歩です。決定の場に女性がいないことは、女性たちが持つ視点が感性として理解されにくいことです。忙しい男たちには、理詰めで説明され納得いくまでつきあってく

れるほどゆとりがありません。そんな彼らが動くのは数字売上です。

社会の半分が女性なら、文化も女性が半分は占めてもいいのではないか、いや半分占める必要があるのではないか。まず、文化としての本から始めよう。そんな思いとブックリスト要望の声に励まされて、女の本の情報誌『EVEDATA』をつくりました。初めての作業でなれないこともあり時間のかかったこと、あゝしんどいと思いつつも本業界におけるアフターマティブアクションをしているんだと孤独な戦いに毎年挑んでいくつもりです。

今年の一月に創刊した『EVEDATA 91年度版』女たちを感激させた本1000冊は完売しました。現在次号の編集に取り組んでいます。今度収録する本は九一年に出版された女性の著書と共著、自費出版に限りません。ミニコミやパンフも載せますのでどんどんご連絡ください。「EVEDATA」に掲載されている女性著書は通信販売もしています。

連絡先／〒162 東京都新宿区神楽坂6-38

中島ビル505 (株)ミクロ・スタジオ内

☎ 03-3267-6741

S 性暴力と T たたかう O 女たちの N ネットワーク90

Ston'90 は「夜道を安心して歩きたい!!」「女と子どもたちへの性暴力をなくしたい!!」と思う女たちが活動しているネットワークです。女性と子どもたちが、男からの暴力に脅かされることなく、自由に安全で、のびのび暮らしていける社会に向かって、同じ想いの女たちへ——Ston'90 の女たちからのラブコールです!! 手をつなぎ力を合わせ、こころをかよわせて、元氣よく、共にたたかってゆきましょう!!



■女がつくる「防犯」フェスティバル91

「夜道を安心して歩きたい女たち、助けを待つだけの赤ずきんはもういや!」女たちは今たたかう赤ずきん!! とりもどそう!! みんなで歩ける暗い道」を標語に、性犯罪防止の作品を広く募集、元氣な表現空間フェスティバルを開催しました。

■女のかるた制作・販売

女がつくる防犯フェスティバル91出品作品の「赤ずきんかるた」に女の問題全般を加え、更に充実した内容にしました。その名も『女のかるた』ワンセット二千円 化粧箱入り、カラー二色刷りで好評発売中。発売元 有限会社エフ・プラン（新宿区若葉1の19）お申し込みは葉書で。





■三月八日 Tokyoアクション
三月八日は国際女性デーです。私たちは毎年この日、世界の女性たちと心を結び合い、性暴力とたたかう女性たちのTokyoアクションを行っています。今年はニューヨークの女性サクセス奏者MASSAの演奏を楽しみ、ネコのおみこしや色とりどりのプラカードを掲げ、笛や太鼓を打ち鳴らし、にぎやかにパレードしました。

写真提供 『ふえみん』

Ston'90 活動の歩み

- 90年3月 Ston'90 Tokyo アクション (1回目)
渋谷でハデにデモンストレーション
- 5月 あ・そ・ぼ・お・ぜ 女たち!!
(フランク・チキンス公演、ワークショップetc)
- 6月 連続講座①この夏性差別ポスターをなくすには——
(広告ウォッチング)
- 7月 女の視点で“防犯映画”を観てみよう!
(セントラルプラザ於)
- 8月 女のからだから新宿 (長野県安曇野遊学舎にて)
- 10月 東京都主催、ミスコンテストに反対・抗議
(コンテストは取りやめ)
- 12月 女が視る子どもへの性的虐待
(クレヨンハウス於「アメリカ」上映)
- 91年3月 Ston'90 Tokyo アクション (2回目)
(日比谷公園小音楽堂)
- 7月 子どもへの虐待を考える
(クレヨンハウス於、森田ゆりさん講座)
- 9月 女がつくる防犯フェスティバル91
(豊島区民センター於プロジェクトたたかう赤ずきん)
- 92年1月 「女のかるた」製作・発売
- 3月 Ston'90 Tokyo アクション (3回目)
渋谷でにぎやかにデモ

●連絡先

ストーン

☎

03-3354-4096 (インフォメーションのみ)

東京都福生市福生郵便局私書箱35号

郵便振替口座 東京1-538758

プロジェクトたたかう赤ずきん気分付

ネットワーク参加費 年二千元 (ニュースレター送ります)

例会 毎月第一土曜日 (地下鉄・曙橋：新宿区婦人情報センター・参加大歓迎)

ワーキング ウーマン



一、ワーキング・ウーマン (W. W.) とは？

名古屋を活動の拠点とする会員数約百名のグループ。発足したのは、一九八六年四月。

会の趣旨は大きく二つあって、一つは「男女雇用機会均等法」を実効性のあるものにする、もう一つは女性が生き生きと働けるよう、役立つことは何でもやる、というもの。

一九八六年は「均等法」が施行された年である。それまで、職場の男女差別をなくす「男女雇用平等法」の制定を求めて行動していたグループが、「均等法」の施行を機に

先述のように活動内容を変え、名前も変えて再出発した。

しかし、「均等法」を利用したり、法律改正を要求していくことは、必ずしも多くの女性にとって身近なこととは言えない。

たとえば、個々人が職場で出会うのは、どうしてお茶汲みが差別なのか、まわりの人たちに理解してもらわなければならないとか、女性に定形的な仕事ばかり割りふるといような仕事の配分については、私はこういう考えでこういう仕事をやりたいのだと上司なりにうまく伝えなければならぬとか、昇任についてもそのポストにふさわしい能力などを身に付けていなければならない、などの問題ではないだろうか。

だから、いろんな意味の「力」を身に付けてゆくこともしたい。それに、仕事をしていても生活も楽しみたいから食品添加物や農薬、合成洗剤についても考えよう、ファッションショーやパーティーもしよう、毎年働く女性の応援者をベスト・マンとして表彰しよう、などなど、まあ、かなり無節操にいろんなことをやってきたグループである。

二、現在やっていること

そして今やっていることは、『何でもなれるゾ、女の子、男の子』という名のビデオ作りである。中高生を対象とし

た教材用で、「こういう仕事をしたと思うたらそれを目指して、まっすぐ進んでほしい。職業に女向きとか男向きなんてものはないよ、あなたのなりたいたいものにあなたは向いているんだよ」というメッセージを込めている。

ビデオの内容は、登場する女性は、パイロット、トラック運転手、テレビのディレクター、医師、建築士、弁護士男性は、保育者と看護士である。

ビデオカメラなんてさわったことがない、編集なんてまして……というメンバーばかり十名で昨年の六月から始めた。シナリオを書き、撮影に行き、元気な女性たちに出会ってこちらまで元気になる。職場の人たちがとても好意的で協力してくれるのは、彼女らが信頼されているからだとうれしくなる。それぞれを約三分にまとめ、持ち寄ってああこうだと言いついているうちはまだよかった。素人ばかりじゃちょっと不安、というので某テレビ局のプロデューサーに観てもらった時から苦難が始まった。画の撮り方、編集の仕方、一秒きざみにチェックされたのである。

それからというものの、撮り直しをしたり、元テープを全部見て編集し直したり。それでも、頑張っただけで医師の手術シーンになると、みんなキヤーキヤー言っただけでナレーションなんて聞いていない、なんて笑えないことも。そうか、いい場面を長くすればいいというもんじゃないのだ。

こういうわけで、今年三月完成予定が五月に延びたが、売れる物ができそうである。ぜひ多くの方に買っていただきたい。(約三十分のテープで定価八千円 連絡先後述)

三、今アピールしたいことと今後やっていくこと

やはり「均等法」改正だ。私たちのメンバーが中心となっている民放の嘱託員の労組が差別是正を求めて、一昨年度男女雇用機会均等調停委員会に調停を申し立てをした。

しかし、会社側の同意がないということで、調停は開かれなかったのである。均等法ができて丸六年たつのに、まだに全国でただの一件も調停が開始されていないのは、まさに、この相手側の同意がなければ調停が開始できないという法律の問題である。ほかにも問題は多々あるが、努力義務規定を禁止規定にすることも声を大にして要求したい。さて、今後やっていくこと、であるが、事務局員の一人の私としては、「均等法」改正運動を大きく盛り上げたいと思っている。が、五月以後、八名の事務局員が頭を突き合わせて話し合えば、アツと驚く企画が持ち上がるかもしれない。

(文責 奥田祐子)

連絡先/ワーキング・ウーマン

〒464 名古屋市中種区茶屋が坂2-6-B-805

☎ 052-961-8877 (北村)

れ組スタジオ

・東京

れ組通信



へれ組スタジオ・東京は、レズビアン、女を愛する女たちのコミュニティである。

この男社会の中で、孤立させられ、偏見に満ちた価値観にさらされているレズビアンは、コミュニティを作り仲間と出会うことで、偏見を脱し、社会によって奪われていた力と誇りを取り戻す。そしてなぜ一般社会で私たちがこんなにも、抑圧され、力を奪われていたのかを考えることができる。

この男社会は、女同士のつながりを危険なものとして排除する。女が男にエネルギーを向けなくなれば、男が女を搾取するシステムが崩壊するから、レズビアンは差別されるのだ。コミュニティの中で女同士連帯し、また男と関係を作らないことで搾取を拒否するレズビアンは、存在自体がフェミニズムである。この事実を女の運動の中で示すのもへれ組スタジオ・東京の活動の一つである。女のセク

シャリティに新しい可能性を提唱し、強制的ヘテロセクシヤリティ制度を打ち壊すのだ。

機関誌『れ組通信』はレズビアンからあらゆる女たちへのメッセージである。レズビアンがレズビアンとして感じたことを、それぞれ自分の言葉で書いている。社会問題、家族のこと、自己史、恋愛、コミュニティづくり、本や映画の感想、マンガ、詩、あらゆる分野にレズビアンとしての視線があらわれる。月刊で一部四百円。スタジオ維持会費一万二千元、もしくは講読料五千円を払えば、女なら誰にでも一年間『れ組通信』が届けられる。女として主体的に生きたいと願うあなたなら、『れ組通信』はきっと新しい視点やパワーをもたらすことだろう。

この他ハイクやパーティ、自助グループ、海外文献の翻訳、読書会。ヘテロ社会の偏見と戦い、ヘテロセクシャルの女性たちにレズビアンの可能性を提起するための分科会エイズ法案反対などの社会問題グループ。これらは会員の中の有志が主体的に主催し、また参加する。へれ組スタジオ・東京には特定の人によって決められた活動方針はない。必要な事務作業や会計、通信の編集者の引継ぎなどは、月一回のオープン制運営会議で決まる。

また、日本の各地に存在するレズビアンコミュニティの間のネットワーク作りや、他のレズビアングループの主催するイベントへの協力。今、日本のレズビアンコミュニティは、全国規模で広がっていきつつあるのだ。無論、海外のコミュニティとの連絡も行う。

現在「レズビアン・ウィーク・エンド」という合宿が、年に四回のペースで開かれ、百人前後のレズビアンが全国から参加する。毎回有志のオルガナイザーが立ち、多くの分科会がやはり有志により主催される。C・Rやコ・カウセンシング、仕事や共同生活、関係性やセックスについての分科会、スポーツ、お絵描き、ビデオ鑑賞、ディスコ、バーベキュー・パーティなど。「れ組スタジオ・東京」はこの合宿に協力し、オルガナイザーの申し入れに従い、申込みや問い合わせの受け付け先になるなどのサポートをする。

現在、「れ組スタジオ・東京」が協力している催しの一つは、今年（一九九二年）五月に日本で行われる「ALN（エイジアン・レズビアン・ネットワーク）まつり」である。

ALNの目的はアジア人のレズビアンが連帯し、欧米の

価値観によらないアジアのレズビアン文化を作ること。そして欧米からの植民地支配の歴史と、今なお存在する人種差別に対し、アジア人のレズビアンがマイノリティとして誇りを獲得するためのコミュニティを作ることである。

今、日本のフェミニズムの中でアジアが大きくクローズアップされている。「ALNまつり」はそれに大きく貢献するだろう。今回の会議に日本以外のアジア各地から、四十人はどのレズビアンが参加する。彼女たちは私たちの中のアジアへの規制概念を打ち壊し、新しい価値観をもたらしてくれるだろう。

エネルギーは溢れるほどにある。足りないのは資金だ。

同じ女であり、アジア人であるあなた、ALNに協力をお願いします。アジアの女の未来を共に作っていきませんか。

☆「れ組通信」講読の申込先

れ組スタジオ・東京

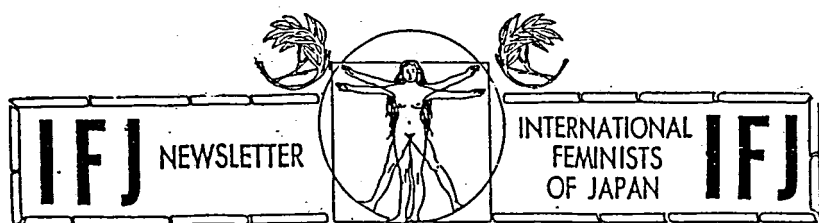
〒160 新宿区荒木町23 中沢ビル3F JOKI内

☎03(3226) 8314

☆「ALNまつり」連絡先

れ組スタジオ気付 ALN日本

文責 月森 銀



IFJ (International Feminists of Japanの略) は、約十年以上も前から活動している国際的なフェミニストのグループで、Newsletterも月1回発行しています。

毎月第1日曜日に午後3時から5時まで、例会を、新宿区婦人情報センターの3階の会議室で開いております。日本女性と在日外国人女性との交流を深めながら、多角的に女性の自立と発展のための方向をさぐってきました。例会は外部からお招きした女性たちにお話いただく場合と、内部で題目を決めて話し合う場合があります。

〈あごら〉の斎藤千代さんも「イラクの状況」について昨秋お話になりました。「女性と政治」という問題で前豊島区議の酒井和子さんと、現東京都議の三井まり子さんがそれぞれ話された月もあります。

3月は、女性に役立つ情報を編集しようということで話し合いました。英語で書かれるお医者さん、歯医者さんで適当な方々はいないだろうか？等です。

長年にわたって〈IFJ〉と〈あごら〉とのかけ橋的存在であったChris が帰国されてしまうので、新しい関係作りが必要になっていきます。

八木 江里

(IFJニュースレター編集部・あごら会員：文責)

*通用語は英語ですが、お招きした方々の日本語は英語に通訳します。

INTERNATIONAL FEMINIST OF JAPAN



INSIDE INFORMATION

The IFJ Newsletter has been published monthly since January 1983. It is funded, in part, by IFJ membership dues of ¥4,000 per year (¥10,000 for supporting members) and donations. (Membership fees, voted on in May, 1987, do not completely cover the cost of printing and mailing the newsletter.) The newsletter is put together each month by a group of volunteers. Anyone is welcome to help—one time a year or every month. Whenever you can help, we need you! Our editorial policy is subject to the wishes of all IFJ members. We print any material that is sent to us by members, as is, unless otherwise requested. We encourage all IFJ members to submit articles, book reviews, opinions/responses, news items, poetry, short stories, cartoons on feminist issues, etc. Advertisements are accepted, but must be kept as short as possible. All contributions should be signed by the writer, but we will consider publishing anonymously at the writer's request. We also ask that a phone number be attached to the contribution, should the need arise to contact you before publication. The newsletter is timed to reach members a few days before each meeting.

IFJ meetings are held on the first Sunday of each month, from 2-5 pm at the Fujin Joho Centre, a short walk from the A4 exit of Akebonobashi Station. This is the Toei-Shinjuku Line. The usual itinerary is as follows: 2-3pm: Tea and chatting: 3-3:30: Business meeting: 3:30-5pm: A presentation, speaker or workshop. Your participation is welcome and needed. The group exists for women. Meetings are closed to men unless invited by a show of hands at a prior meeting. After paying dues and attending two meetings (and signing the book) within a year, members have voting rights. There is a meeting fee of ¥1,000 for non-members.

日本女性学

“研究”と“運動”の並存する



研究会

解放の手段としての“女性学”をめざして

日本女性学研究会 (The Women's Studies Society of Japan - 以下 WSSJ) は、女の過去、現在における状況に疑問や不満を感じ、なぜそうした状況があるのかを問い、それを変革していきたいと考える人々の集まりです。「女性学」はそのひとつの方法といえましょう。

活動には例会、運営会 (各々原則として月一回)、分科会・プロジェクトチームがあり、定期刊行物として年十回 (一・八月は休み) 発行のニューズレター「Voice of Women (VOW)」、年一回発行の『女性学年報』等があります。

発足は七十七年に京都において。市内の会員宅に事務所を置き、当初一年半程は月一回の講演会スタイルの例会に、理事長・顧問等をおく組織でした。そして八〇年に議論の末、現在の組織・運営方法が誕生しました。つまり、一切の「長」や代表をおかず、上下関係のない対等な個人の合

議制にしたのです。「ピラミッド」から「アメーバ」への変身であり、これはとりもなおさず女性学そのもののあり方やフェミニズムの思想にも関わった変革であったと私たちは自負しています。

現在の会員数は約三百人。女性学に関心のある人は誰でも (性別を問わず) 会員になります。年会費は自己申告によるスライド制で五千円以上。会員は関西地域の間が約半数で、他が全国各地という割合で、その層も、学生、教員、会社員、自由業、主婦等多様です。「事務局」も当初から、会員の研究室、ヘイイメンズブックス松香堂内を経て、現在の資料室 (会員の閲覧・貸出可) も兼ねたヘウインズ (連絡先後述) に入会受付やニューズレター発送等の事務を委託しています。

例会は、会員の研究・活動報告、および意見の交換・交流の場で、非会員の方も参加できます。運営会は本研究会

の「最高意思決定機関」であり、会員は誰でも参加でき運営や例会企画の提案・決定等がなされます。事務処理を円滑に行うため、「運営委員」が毎年約十名、立候補制、任期一年で選ばれます。

分科会・プロジェクトチームは、各会員の参加は自由で、三人以上集まれば新たに作ることもでき、例会の企画・担当をして、その活動を発表することもできます。

『VOW』編集は会員の持ち回りで、各々の担当者の個性もうかがえます。『女性学年報』は十二号が九一年の秋に発行され、研究論文、エッセイ、海外情報等をまじえた充実した内容で、毎年の年報合評会も例会の大切な「定盤」となっています。

最近の例会テーマのいくつか、および分科会をご紹介しますと、「性差別と表現の自由」、「学校における性教育の問題点」、「日独比較女性学シンポジウム」、「戸籍制度と夫婦別姓運動」、「子どもの性的虐待を考える」、「八〇年代フェミニズムを総括する」、「フェミニズムから女性施策を撃つ」等で、ビデオの上映会・バザーといった企画もあります。この九二年四月は「アジア女性会議」の大阪地域会ということで「アジアとフェミニズム」で、この例会を機にアジアに関する新たな分科会ができる動き

もあります。

現在の分科会は、「近代女性史分科会」、「女の生と性を考える分科会」、「マスコミにおける女性差別を考え行動する分科会」、「教育者会議」、「女性のセクシャリティの選択を考える分科会」、「フェミニスト・セラピー分科会」（カウンセリングも行っています）、「フェミニスト企画集団」（京都市社会教育総合センターでの女性学講座の企画、実施を担当）、「語り合う分科会」があります。このところ、他のグループとの「掛け持ち会員」の増加、会員の広域化、また、地域の行政が「女性学講座」を始めた（これ自体は喜ばしいことなのですが）等々で、なかなか例会に人数が集中しない傾向もあります。しかし、そんな時こそ、「自主的に、考え、語り合い、行動する場」としての、また地道な研究を重ね、発表していく場としてのWSSJの存在は重要だと考えます。「研究」と「運動」の並存した多彩で柔軟な会です。興味のお在りの方、どうぞお気軽にご連絡下さい。（小川かおり）

~~~~~

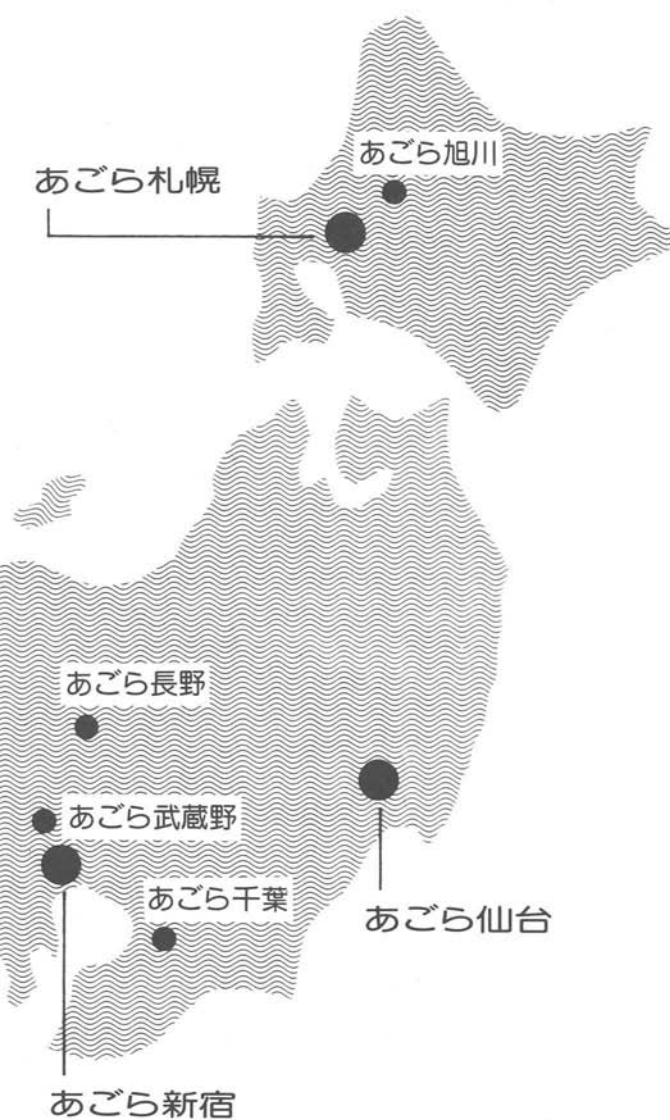
連絡先：〒564 大阪府吹田市江の木町5の3

SH江坂4B ウィーンズ内 「日本女性学研究会」

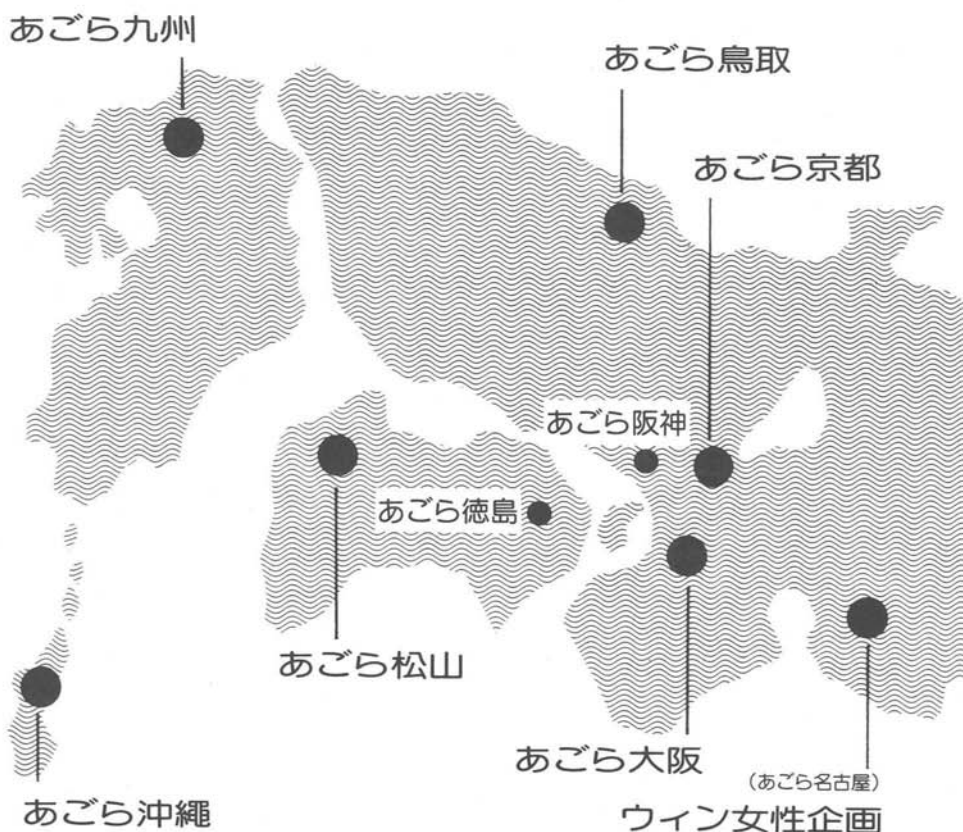
☎06-386-8837 月～金 十時～十七時

# 今年、 〈あごら〉は二十歳!!

〈あごら〉はギリシャ語で「人と人との出会いひろば」の意味。女の生き方、人間の解放について話しあう〈ひろば〉、さくのない〈ひろば〉、年齢・学歴・男女に関係なくだれでも話し合える〈ひろば〉です。一九七二年以来、資料誌『あごら』（年二回刊）を、また一九七七年からは『月刊あごら』（年十一回刊）を発行してきました。また、現在北海道から沖縄まで各地に地域活動の拠点をもち、それぞれ自主的な活動をしています。



## 広がる〈あごら〉地域活動の拠点



会費 年額7200円

住所・氏名・電話番号、入会の動機と簡単な自己紹介を振込用紙に書いて、  
郵便振替・東京0=5264〈あごら〉へ

〒160 東京都新宿区新宿1の9の6〈あごら〉事務局 ☎03=3354=3941

## 愛媛・ミスコン取材顛末記

### 小倉いづみ

愛媛県に二つしかない総合大学、国立愛媛大、私立松山大学の大学祭パンフレットから「ミス・コン」の文字が消え、代わりに仮装行列がプログラムに組まれている。保守的な土地柄とは言っても、やはり若者はミスコンを女性差別と考える正常な人権感覚を持っているのだ、という思い込みから、ミスコン取材が始まった。しかし、大学祭実行委員たちに話を聞くにつれ、かえって「大学生は保守的」という認識が強まった。廃止は「女性差別」という批判に応えたのではなく、「出場者が集まらない」というのが理由だったからだ。松山大学の女性教授も、「ミス・コン廃止は良い傾向でも、最近は大学祭自体が魅力を失っている」と学生祭自体の凋落ぶりを原因にあげている。

例年学生祭初日にMiss愛大コンテストを開いていた愛媛大学。数年前からコンテストへの出場者が集まらず、委員らが知人のサークルに模擬店の場所決めなどで便宜を図る代わりに「かわいい子」を推薦してもらっていた。九〇年はそれでも出場者が集まらず、モダンダンス部員が出場する「出来レース」を仕組んだが雨で中止。昨年夏ごろ、実行委員が誰からともなく「今年はやめよう」と言い出し、中止が決まった。

松山大学では、出場者を集めるため委員が直接学内で評判の女子学生に声をかけた。しかし、ことごとく断られた。「都会の大学に比べ、マスコミに出演するなどの付加価値がないから不人気なんだ」。起死回生を狙った九〇年、賞品を海外旅行にし、

場所もディスコを借り切って豪華さを売り物にした。しかし、大学から支給される費用では足りず、入場料三千円を取ったことに、「少数しか楽しめない企画にそんな金をかけることはない」と学内で反発の声が上がった。昨年一月の全校アンケートでは、教授たちの「女性差別だ」という意見も含め回答の半分が継続に否定的な反応だった。最終的には、大学祭の運営を受け持つ新一年生委員十一人が誰も、ミスコンを自分のやりたい企画として選ばなかったので中止になった。

一年生女子委員は出演者不足の理由を「しょせん、ミスに選ばれるのは一人。選に漏れて、あとで『どうしてあんな人が出るの』なんていう陰口が聞こえてきたりするのがいやなんだと思う」と分析。八人の女性委員には、コンテストを女性差別と考えている人はおらず、「人あつめが大変だから自分で企画したくないだけ。きれいなものはきれい。ミスコンは大学祭の『華』で良いじゃないですか」という。愛媛大の一、二年生の中には、「来年、キャンパス内でかわいい子の写真を撮って審査するなど、新しい方法で復活を目指す」という学生もいる。

女性差別の解消で一番恩恵を受けるはずの若い女性が保守化しているという統計を、裏打ちするような話だった。学生祭当日、「若い女性にとって、女性差別解消運動はどういう意味をもつのだろう」と考えこみながらキャンパスを行く学生たちを眺めた。

(朝日新聞 松山支局)

北から南から

## ウィン女性企画

### 国際平和文化村建設にご協力を

ベトナム戦争から十五年余りの年月がたちました。全世界が共存・共栄と自然保護のため、より深く理解し合い、協力し合うことが必然となっています。



「ミシン運動」をとおして日本とベトナムとの民間交流が始まりました。八百台あまりのミシンは、戦争で夫を亡くした女性や孤児たちの施設に渡り、教育手段、生活手段として大活躍しています。この交流のきずなを更に深めて意義あるものにするため、このたび、プンタオの海岸沿いに「国際平和文化村」を建設するという構想が生まれました。「国際平和文化村」は、その趣旨に賛同した民間会員の基金によって運営され、同じ時代を生きる人間の交流、真の相互理解を深めることを目的に、まったく民間レベルで活動するものです。百ヘクタールの予定地を少しずつ長期計画で建設していきます。世界の人々が集い、平和について

学ぶ、セミナーハウスや劇場を作りたいと夢は壮大です。ベトナム友好市民の会では、今後この国際平和文化村建設に取り組み、基金を受け付けておりますので、郵便振り込みで

名古屋5-94819 ベトナム友好市民の会宛にお送りくだされば幸いです。またこの運動を一人でも多くの方々に知っていただくために、シールを販売します。ご協力くださる方は左記にご連絡ください。

〒471 豊田市野見山町1-66-2 中根洋子

☎0565(88)3846

出してもいいの? 自衛隊!!  
「育てよう、私たちの平和憲法」

日時 5月23日(土)午後2時

会場 立川市中央公民館

お話 浅井基文さん(日本大学教授)

主催 教育フォーラム「ひと・びと」

資料代 500円

連絡先 田中(☎0425-27-8095)

◆なたね梅雨……だとか、一週間降り続いた雨がやっと上がり、久しぶりに、青空を見ました。

女性問題に関心をもちだしてから日の浅い私、先日、はじめて『あいら』を手にし、いいようなない感動が頭の先から足の先まであふれました。

高橋ますみさんの書かれた本を二冊続けて読み、どうしても『あいら』が読みたくて、婦人会館の情報資料室で探してみたらありました。うれしいことに、これから購入を計画しているとのこと（クレヨンハウス等で在庫分だけ手にいれてあるだけだそうです）その折、大阪にも会があると聞き、借りてきた一四六号・一四八号に吉田さんのコメントがあり、更に偶然にもお近くの方だということがわかり、早速お声をかけてみようと思っています。ささやかですが、吹田の女の活動の拠点づくりを、と、仲間たちと模索して

いるところです。定期購読をしたいのですが、どのようにすればいいのでしょうか。ぜひへあいらの仲間入りをさせて下さい。（吹田・小谷訓子）

◆『あいら』（一七〇号）「湾岸戦争をアメリカから見ても」を読みまして、愕然といたしました。なぜかと言いますと、英語サークルの教師が「イラクが……」と話している内容が、私の小学校時代に教えられたものと全く同じで「イラク」が「アメリカ」に変わっているだけです。（第二次大戦中）連続の空襲に逃げ惑う日々が思い出され、クウェートの子どもたちの姿が映し出されると悲哀を感じずにはいられませんでした。戦争は一人ひとりの力で阻止すべきです。（仙台・奥山玲子）

◆三月二十八日、十八時三十分から福岡市女性センターへアミカスにおいて、元従軍慰安婦の文玉珠（ムン・オクジュ）さんと韓国挺身隊問題対策協

議会の事務局の方のお話がありましたので、その時のことを覚えて限りの書きます。

お二人のお話が終わって、終了予定時刻まで三十分ほど余裕がありましたので、質問の時間になったわけです。

その時最初に手をあげられた、年齢五十〜六十歳ぐらいの方が、従軍慰安婦と女子挺身隊はまったく無関係で別物だというふうに暴言をのたまわれたわけです。

自分はそれを聞いて茫然として、あきれてしまい、自分が座っていた席の近くにいた女性の方のうちの何人かが、その男性に対して「帰れコール」を浴びせかけました。

彼女たちのやったことはマナー違反だとは思いますが、やった気持ちはわかりますので、それをあえて非難する気にはなりませんでした。

（福岡・谷 和美）

(広島・松永眞千子)